

災害から学んだこと

平賀 圭子

1 「女性と災害」をテーマとした学び

もりおか女性センターは、盛岡市が男女共同参画社会の実現を目指して、2000年に市の計画に基づいて開館した施設です。2005年には、働く婦人の家を、もりおか女性センター別館として統合しました。その翌年の2006年に指定管理制度の導入が行われ、特定非営利活動法人参画プランニング・いわてが指定管理者となりました。

特定非営利活動法人参画プランニング・いわては、その設立目的を「男女の性別に関わりなく、一人ひとりの個性と能力が十分に発揮できる地域社会の実現、そして、一人ひとりが大切にされていることが実感でき、安全で安心な暮らしが保障される心豊かな地域社会の実現に寄与する」こととしています。この目的と「盛岡市男女共同参画計画～新たなはんプラン」に基づいて、2006年から様々な事業が展開されることになりました。

女性と災害に関するものとしては、2007年度には、シリーズ災害と女性「一人ひとりの安全が守られるまちづくりのために」という講座を開催、ウィメンズネット・こうべの正井礼子さんから阪神淡路の震災で女性たちに何が起こったかを中心に報告をいただき、2007年7月16日に発生した新潟県中越沖地震の際、すぐに支援活動を行った岩手県立大学地域貢献サークル「風土

II 実践の展開

熟人R」の方々の報告と、岩手県と盛岡市の防災担当職員からの県内防災への取り組みについての報告などのあと「災害から見えてくるもの～その時あなたは」と題したパネルディスカッションを報告者を中心に行いました。

2008年度には、女性と防災「ここから発信フォーラム」を「日常からの“弱いところ”に災害のダメージは強く起こります。女性の視点で防災のまちづくりを、一緒に考えませんか」という呼びかけで、阪神淡路大震災で被害経験のある西宮の石井布紀子さんを講師に午前中に講演をいただき、午後はグループに分かれてワークショップを行いました。ここへ盛岡市の消防防災課の方も参加していただき、その後の発展へとつながっていきました。

2010年度には、「女性と防災～一人ひとりの安全が守られるまちづくりのために～地域の防災に女性の視点を！」という呼びかけをして、2008年度の講座に参加された盛岡市消防防災課課長補佐の石井健治さんの力をお借りして、学校の体育館で移動学習「あなたの地区は大丈夫？～避難所シュミレーション」を行い、避難所づくりの体験をし、その後センターに戻って、静岡県が制作した避難所運営ゲーム「避難所 HUG」を使って、ワークショップ「避難所をデザインする」を行いました。その数日後に、盛岡市保健福祉部地域福祉課の方を講師に、公開講座「盛岡市における要援護者避難支援～ふれあい、ささえあい、こころを結ぶまちづくり」と、NPO法人イコールネット仙台代表理事の宗片恵美子さんを講師に、「災害時における女性のニーズ調査～なぜ防災・災害復興対策に女性の視点が必要か」を開催しました。仙台の宗片恵美子さんは、東日本大震災でも支援の中心になって活躍されました。

このように、毎年のように「女性と防災」を講座事業の大きな柱の1つと考えて実施してきましたが、盛岡は昔から地震には強いと言われていましたし、比較的災害の少ないところという安心感がありました。まさかこの学びが実際に役に立つことがあることなど、当時は予想もしていませんでした。

しかし、2011年3月11日に起こった東日本大震災は想像を絶するものでした。そして、「学びを積み重ねてきたて本当に良かった」と感じるようになるのです。

2011年度の震災発災後には、行政の復興計画の中から女性が締め出されていくことに問題提起する意味も込めて、「私たちの復興会議～つながる、ひろがる、変える！」を開催し、「男女共同参画の視点で考える地域防災とは」と題して仙台市長の奥山恵美子さんに講演をお願いし、その後シンポジウム「3.11からのスタート～つながる、ひろがる、変える」を、東日本大震災以前の2008年度の講座の講師で、発災後すぐに岩手の支援活動に入ってくくださった石井布紀子さん、発災後学生ボランティアとして活躍した県立大の八重樫綾子さん、東日本大震災女性支援ネットワーク世話人の山下梓さんの3人をシンポジストに開催しました。

こうした学習から実に多くのことを学びました。東日本大震災後直ちに動き出すことができたことも、震災以前からのこうした学びと全国各地からの支援のネットワークがあったからだと思います。

2 「3月11日」そのとき私たちは

2011年3月11日14時46分、マグニチュード9.0という日本周辺における観測史上最大の地震、東日本大震災が発生し、東北地方太平洋沿岸を中心に各地に壊滅的な被害をもたらしました。2012年8月の統計によると全国の死者、行方不明者の数は18716人にのぼり、岩手県ではその31%にあたる5876人となっています。津波による被害は、岩手県の沿岸200キロにわたり、被害を受けたのは12市町村に及びます。

世界一と言われた防波堤が崩壊し、道路も崩壊し、交通網も寸断されて、孤立化した集落もたくさん出ました。生活のライフラインが止まり、とるものもとりにあえず避難した人たちの生活を直撃しました。

又エックの学習交流会参加の時に

私はこの時、国立女性教育会館で開催されていた学習交流会議に出席していました。3月11日の午後から開催され、ちょうど堂本暁子さんの講演

II 実践の展開

を聞いている時でした。長い揺れの中でその異常さに驚き、机の下に潜ったり出てみたりしながら、最後まで講演を続けられた堂本さんに感心していました。ヌエックは自家発電装置も完備していて停電することもなかったため、テレビで被害の状況を見ることができました。その様子のすさまじさに、岩手県内から集まっていた20人ほどの参加者は、留守にしている自宅や職場のことが心配になりました。しかし、電話は通じません。様子がわからない中で不安は増すばかりです。とにかく早く帰りたいと思うのですが、交通手段はまったく途絶えてしまって帰るすべがありません。小型バスで来ていた県南の方々は急いでそのバスで帰りました。道路はどうなっているのだろうか、無事に帰ったのだろうか、それさえ知る手だてがありません。携帯電話がだめなら公衆電話はどうだろうといろいろ試すのですが、思うようになりません。そんな時、アメリカからの電話だけは通じました。宮城県気仙沼市に実家のある職員は、アメリカのインターネットを使って実家の所在地の安全を確認してもらい、とりあえずは安心できました。こんなふうにアメリカの電話に助けられる場面もありました。

学習交流会議が終了した13日の午後1時に、周りの方々に助けられて用意できたバスに11人で乗り込み帰ることになりました。盛岡まで実に20時間かかりました。ひび割れた国道4号線をただひたすら北に向かって走りました。電気が全くつかない真っ暗やみ。信号も止まっています。今までの光にあふれた暮らしが信じられないほどでした。緊急車両がたまに来るだけなので信号が止まってもそれほどの混乱はなかったと思います。真っ暗やみの中を走っているので周りの様子がよくわかりません。埼玉県、栃木県、福島県、宮城県と走り抜けて岩手県に入りました。暗くて周りの様子が分からなかったのがかえてよかったのではないかと後で思ったほどです。周りの恐ろしい光景を見ずにすんだのですから。

盛岡では

20時間後の14日午前9時半にもりおか女性センターの近くまでたどりつ

きました。周辺はあまり変わった様子はありませんでしたが、1時間ほど前に近くのデパートでガス爆発が起こったため、センターに近寄ることができない状態でした。

震災発生後、盛岡市内は停電していました。センターは市内中心部にあり、県庁や市役所、病院などが集中しているところなので、ほかより早く13日の午後には通電しました。そのためデパートでは、再開するために14日朝早く準備に入り、地震で壊れたガス管からのガス漏れに気づかず爆発を起こしたのでした。



津波で船がビルの上に。
大船渡市内の様子。3月25日

3月11日もりおか女性センターでは、震災発生後電気がとまり、電話もエレベーターも暖房もとまってしまいました。その日、職員は全員帰宅することになりました。12日は第2土曜日で本館職員は出勤日に当たっています。貸し部屋の予約や相談の予約などがあり閉館については電話連絡がつかないため来訪者があるかもしれないので開館することにしました。バスもとまっていますし、電気も停電のままです。エレベーターがとまったままなので5階まで階段を上り下りしなければなりません。



4階まで津波が押し寄せ、中が空っぽになったマンション。
4月3日陸前高田市

職員の自宅待機は3月21日までとし、そ

II 実践の展開

の間輪番制で2人ずつ出勤としました。13日の午後、やっと電気がつきましたが、エレベーターと駐車場の利用は4月3日まで回復しませんでした。しばらくは、寒さと不自由の中で仕事をしました。電気が復旧して、テレビが見られるようになって初めて被害の状況がわかり愕然としました。沿岸にいるたくさんの知人たちの安否が気になってきたのです。

女性たちを性被害から守ろう

真っ先に頭に浮かんだのが、阪神・淡路大震災や中越沖地震の際の女性たちからの報告の中に、混乱の中で起きる女性に対する暴力の事です。学生ボランティアとして支援に入る女性が狙われやすいとも聞いていたので、「被災地に行くボランティアの方へ」というチラシを作り、大学などで配布していただきました。1人で行動しないこと、1人での女性や子どもを見かけたら声をかけようと呼びかけたのです。

3 デリバリーケアの開始

手に入らなかったガソリンが入り始めたのは、発災2週間後ぐらいからです。被災地にはじめて入ったのが3月25日でした。そしてあまりにも悲惨な被害の状況を目の当たりにすることになるのです。次第に電話も通じ始め様子もわかってきました。とにかく何から何まで失ってしまっていること、必要と言えはすべてのものが必要な状況であること、支援物資は余るほどあるところと、まったく何もないところがあることなどでした。被災している人の約半分が指定避難所に避難しているが、あとの半分は指定避難所以外のところにいること、避難所には支援物資が届くが、それ以外のところにはないこと、赤ちゃんがいる人、老人がいる人、障害を持っている人、などいわゆる災害弱者と言われている人たちの姿が避難所には見えないことなどに気づきました。そしてその人たちには支援の品は届かないのです。避難所に物資を貰いに行ったら「勝手に避難所から出た人には渡せない」と断られたと

いう話もありました。道路が崩壊して孤立してしまったところから、「赤ちゃんのミルクがほしい」という SOS が入りました。「一人ひとりを大切にする」ことを理念としている私たちはここで何をすべきか考えました。そしてその多様性を大事にするために一人ひとりの要求に合った物資をその人に直接届けたいと考えました。そしてその活動に「デリバリーケア・プロジェクト」と名前をつけました。

内閣府を通じてジョイセフからの支援物資が初めて届いたのは3月26日でした。その後もたくさんの支援物資が届けられ、受け入れを中止した5月16日までの間に大きな段ボール855個分になりました。

3月30日には、県内一の読者数を持つ岩手日報社に頼んで「ほしいものがあったら電話をください」と記事に書いていただき、ラジオやテレビでも呼びかけました。地元の新聞とラジオの効果が大きかったように思います。どんどん電話がかかってくる。その都度、必要だと言われたものを取りそろえ、車に積んで走りました。ほとんどのところに3日以内にお届けできたと思います。

最初の頃は宅急便もなく、すべて自分たちの車や支援に入ってくださった方々の車を利用して届けました。町が破壊されているためにカーナビが役に立たないこと、あるはずの道路がなくて届けることに苦労したことなど数々の困難が伴いました。また必要なものを購入したり、届ける際のガソリン代など費用がかさみます。

そこで全国の女性のネットワークを通じて支援を呼びかけました。全国各地から次々と支援金が送られてきました。それを使って12月末までに400回近く荷物を送り出すことができました。混乱の中で記録も十分ではありませんが、取りに来てくださった方の分も含めると600回ぐらいにはなると思います。

荷物をそろえ、荷造りをし、車に運び込むという力仕事をセンターの職員（ほとんどが女性）たちが実によく働いてくれました。「こんな状況を見て少しでも役に立ちたいと思った。やらせてもらったことに感謝している」と口をそろえて言ってくれました。

II 実践の展開

人の多様性に気づく

デリバリーケアを続けるなかで、私たちは実に多くのことを学びました。一人ひとりの要求を聞き取り、それを買いに走り、そろえて届ける、という作業の中で、一人ひとりの求めるものが実に多様であることに



注文の品のお届け。デリバリーケアプロジェクト

気づかされたのです。そして一人ひとりの必要が満たされて初めて復興がかなうものだということにも気づかされました。真の復興とは何だろう。道路ができ、立派な建物ができあがることなのだろうか。一人ひとりが自分にとって大切だと思うものに囲まれ、自分でそれを演出できることではないか。ほんのちょっとでも幸せを感じてもらえたら、と思って品揃えに走ったのです。

4 「女性の心のケア ホットライン・いわて」の立ち上げ

支援物資を届けながら、土日には地元の状況に詳しい助産師さんたちと一緒に各地の避難所に入りました。避難所の方々は、身内を亡くしたり、自宅をなくしたり、職場をなくしたりで大変な状況があるにもかかわらず異常とも思えるほどお元気なことに気づきました。いわゆる「災害パラダイス」と言われる状況の中にいるのです。お互い肩を寄せ合って励まし合い慰め合っています。しかし、その中に入れない人や、いずれ現実に向き合う時期が来たときどうするのだろうかと気になりました。

途中で震災が発生して中断はしましたが、この年の3月末まで、内閣府主催のDV被害者のための電話相談、いわゆる「パープルダイヤル」を引き受けていたことから、できればその相談を引き継ぐ形で電話相談ができないかと考えました。内閣府と話し合いが積み重ねられ、5月10日には「東日

本大震災女性の心のケア「ホットライン・いわて」が、内閣府、岩手県、盛岡市・もりおか女性センター、日本助産師会岩手県支部、いわて生活協同組合、参画プランニング・いわての協働で開設されることになりました。

この事業のために、NPOでは盛岡市内に部屋を用意しました。そこには全国女性シェルターネットの相談員が全国から駆けつけて、毎日相談を引き受けてくださっています。その後、面接による相談も行うことになり、もりおか復興支援センター、宮古市生協店舗内、大船渡市内などで面接による相談を行っています。日を追うごとに相談の中身は深刻なものになっています。経済力があり、自立の能力がある人たちは仮設住宅を離れていきます。取り残された人たちの孤独感、無力感のピークは3年目ごろに現れると聞いています。そうした方々たちに今後も寄り添い続けたいと考えています。

5 被災地女性の経済的自立支援のためのデリバリーケア・プロジェクト

避難所を訪問した帰り道にあちこちに点在する建設中の仮設住宅を見かけました。

被災地は、リアス式海岸の風光明媚なところがありましたから、平地が少なく住宅を建てられるような場所がありません。平地のほとんどが被害を受けていますから、かなり辺鄙な場所までいかないと仮設住宅を建てることができません。たとえ元の街に近いところに建ったとしても、街は壊滅状態ですから買い物をする場所がありません。

車もなくしている人も多いので遠くへは買い物に行けません。ご高齢の方はどうするのか気になりました。この問題を何とか解決しなければなりません。被災地の女性たちは、津波で職場をなくしている人がほとんどです。

地域を再生するためにも自分の生活を再生するためにも女性たちの仕事起こしが必要ではないかと考えました。勤めに出ていた人たちもその会社がありません。

II 実践の展開

もりおか女性センターでは、管理運営を始めた当初から、女性が自立して暮らすためには経済力をつけることが大事だと考えていました。ある程度の年齢になると企業に雇われることも難しくなります。そこで、女性が自ら持っている力を発揮できる仕事起こしのための講座「夢をかたちに」を始めました。その後その講座が発展して「女性起業芽でる塾」となり、起業応援ルームの常設へとつながり、常時起業したい女性を応援できるシステムを作りました。

このノウハウを被災地女性の経済的自立のために使えないだろうかと考えました。合わせて買い物に不自由している被災者の皆さんの支援になる事業として、買い物代行と安否確認を目的とする「買い物代行業」の立ち上げを考えました。厚労省から緊急雇用創出事業として盛岡市に出された資金に応募して、事業化することに成功しました。

避難所から仮設住宅への転居が8月半ばまでにはすんでいました。この事業は、新盆も終わった8月22日にスタートしました。野田村、宮古市、大槌町の3ヵ所に、車、パソコン、プリンター各1台、携帯電話2台を配備しました。それぞれの場所に3人の地域の女性を雇用し、盛岡に統括する職員1人を置き、合わせて10人の雇用がうまれたのです。車に「芽でるカー」「お買い物も代行します。声をかけてね」と書いたステッカーを貼り、巡回しています。事業開始後、注文がどんどん増えて、半年後の2012年4月には大船渡に車、パソコン、プリンター各1台、携帯電話2台を増やし、注文が多くてさばききれなくなった宮古市と大槌町に車1台と各2名ずつの人員の増員を行い、全部で雇用者が17人となりました。

元気な女性たちが毎日のように巡回して御用聞きをして、頼りにされています。最初の頃は生きる力もなくして「死にたい」と話していた方も笑顔を取り戻し、元気になっていく様子がわかります。そのことが支援している女性たちにとって何よりの励みになっています。今は行政から給料をいただいているので1回の代行料は100円です。しかし、1回100円では自分たちの暮らしは賄えません。3年後、国からの支援が終わった後、この方たちの

盛岡市緊急雇用創出事業

買い物代行

～被災地女性自立のためのテレバリアーケアプロジェクト～

代行料
1回 100円

芽でるカー
出勤中!!

宮古 地区
大槌 地区
野田 地区



お届け



ポスティング



買い物



安否確認

被災地の
女性スタッフが
活躍中です



買い物と笑顔をお届けします

～事業運営 企画・プランニング・いわて～

II 実践の展開

経済的自立をどうするかが大きな課題です。そこで、もりおか女性センターが積み上げてきた「起業」のノウハウを沿岸に持って行って、この女性たちを起業家として育てることを目的に事業を興すことにしました。3年の間にしっかり育ててほしいと願っています。彼女たちは、毎日買い物を頼むお客さんと接していて、彼女たちの生活上の悩みにも接しています。そしてお客さんのニーズも把握できています。ですから、それが次の仕事づくりにつながるのではないかと思います。地域が最も必要としている仕事を作り出せるのではないかと期待しています。

「復興」という名のもとに、道路や建物などの建設に目が行きがちですが、私たちは、一人ひとりにとっての「復興」とは何だろうと考えつづけました。一人ひとりが生きてよかったと思えるような地域づくりこそが大切ではないかと考えます。忘れ去られることのない、落ちこぼれることのない住民の関係づくりが求められていると思います。そのためにこの事業が役に立つことを願っています。

6 災害から学んだこと

東日本大震災発生後のこの1年半、私たちはいったいどのように過ごしてきたのかもよく思い出せないほど無我夢中でした。

その中で気づいたことは、日常的に考えたり実践してきたようにしか動けないということです。そういう意味でも、日常の男女共同参画センターや女性センターでの学びが大切になってくるのです。目の前に解決されなければならない問題が発生した時に、その解決のために知恵を出し合って考え、行動します。そうするとまた新たな問題が発生します。解決のために学習し、行動します。その繰り返しだったように思います。私たちは、震災後とるものもとりにあえず、必要とされている物資を運び続け、避難所を回るなかで、相談の必要性に気づき「女性の心のケアホットライン」を立ち上げました。

仮設住宅での被災者の困難を見て、「買い物代行と安否確認」の必要性を

感じたのです。それは、阪神淡路大震災を経験した女性たちからの報告を学んでいたことから気づいて行動したものでした。その学びを女性センターの職員が共有していたことも大きな力となりました。大変な仕事であったにもかかわらず、誰ひとり不満を言わず働き続けてくれました。感謝でいっぱいです。全国の女性たちからの支援も大きな支えとなりました。シスターフッドとはこういうことかと実感しました。

被災地では多くの元気な女性たちに出会い勇気をもらいました。仕事や家を失って意気消沈して無気力になっている男性たちもいました。お酒や賭けごとに逃げる姿もありました。男性は瓦礫処理の仕事でお金をもらっているのに、女性は無料で避難所の人たちのために食事づくりをし疲れ果てている姿も見ました。性別役割分業がしっかり生きています。私たちはいつか何を学んできたのだろう。男女共同参画が浸透していないのです。「ここはみな家族なのだから」という美名のもとに、避難所にしきりをつくることを認めない男性リーダーのもとで、発言を封じられて苦しんでいる女性たちにも出会いました。

男女共同参画の理念が、日常生活の隅々まで浸透して初めて、災害に強い、すべての人の安全と安心が保障される社会となるのだという確信を持ちました。世界一と言われた堤防があっけなく崩壊し、長年かかって築き上げてきたものが、跡形なく失われてしまった経験から、何が大事なことをもう一度考え直すいい機会が生まれているのだと思います。

日本中のたくさんの方からのご支援に感謝し、私たちのこの経験が何かの役に立つことを願っています。

(ひらが・けいこ 特定非営利活動法人参画プランニング・いわて理事長)